

# 子供は悲しみを知らず

小川未明

青空文庫



広い庭には、かきが赤くみのつていました。かきねの破れを直して、主人は、いま縁側へ腰を下ろし、つかれを休めていたのです。彼はこのあたりの地主でした。

裏門から、寺のおしようさんが、ここにこしながら、入ってくるのを見ると、ちよつと迷惑そうな顔色をしたが、すぐ笑いにまぎらして、丁寧に迎えました。

「あまりごぶさたをしたので、前を通りかかったものだから。」と、おしようさんは、いきました。

「どうぞ、すしお上がりください。」

地主は、おしようさんを、茶の間へ通しました。

「おお、ここのにわとりは、ねこを追いかけるな。」と、土間の方を見て、おしようさんは、さもおどろいたように、大きな声でいいました。

「このあいだ、卵を産んだので、魚の骨をやりましたら、ねこの分まで、自分のものと思いい、しようのないやつです。」

「ほ、ほう、なるほどしつけは、怖ろしいもんだな。教育のしかたで、いい子も、わるくなるから。」と、あとのほうを、おしようさんは、ひとりごとのようにいって、立ち

上がりました。そして、仏壇の前へすわり、静かにかねをたたき、お念仏を唱えたのです。そこには、軍服姿をした若者の写真が飾られ、お供え物が上がっていました。

「まだお便りがありませんか。もう帰るものは、たいてい帰ったようにききますが。」  
おしようさんは、もとの座へもどりました。

「うちのせがれは、死んだものと、あきらめています。」と、地主は、こう答えて、さすがにさびしそうでありました。

「いつ亡くなられたものかの。」

おしようさんは、声を低く落としました。

「なんでも、南へいった舟は、およそ途中でやられたという話で」

「いや、こんどの戦争では、お気の毒な方が、どれほどいるかしれません。なんにしても、戦争ばかりは、地獄にまざる、この世の地獄ですぞ。」と、おしようさんは、ため息をもらして、瞑目しました。このとき地主のついでくれた茶をすすって、またおしよ  
うさんは、じつと考えていました。庭の木立で、あぶらぜみの鳴く声がします。

先刻から、おしようさんが、なんで立ち寄ったろうかと思つたのが、ほぼ察せられると、

地主は、先手を打つつもりで、

「なにしろ頼みとするせがれでしたので、量見がせまいようですが、当分他人さまのためにどうこうする気持ちも起こりません。」といいました。

「ごもつとものことです。ご存じのごとく、資力のない私どもに、人を助ける資格はありませんが、ほかでない、両親をなくした、子供の身を考えますと、だれも世話をすゝるものがなければ、自分がなくてはという気でやったものの、皆の力を借りねばできぬ事業です。」と、おしよさんはいいました。

「おおぜいの子供の世話では、おたいていでありますまい。」

「いまのところ、まだ五、六人ですが、なにしろこんな時勢で、それさえ荷が重すぎ、ときどき途方にくれますよ。しかし、またいじらしい子供の姿を見ると、これを見捨てられるものかとむち打たれるのです。」

この話をきくうち、地主の目に、一つの光景が浮かびました。過日この孤児園の孤児たちが、連れ立って、書簡せんや、鉛筆や、はみがき粉などをかんへ入れて、売りにきたとき、自分は、つれなく、「みんなあるから、いらぬ。」と、断つたのだった。そのとき、子供らは恨めしそうに、こちらを見たが、いずれも顔色は青く、手足がやせて、

草履ぞうりを引きずつて歩くあるのも物憂ものうそうなようすであつた。

おしようさんは、前の茶ちやわんをとり上げて、残のこつた茶ちやをすすりながら、

「子供こどもには罪つみがありません。みんな大人おとなの犯おかした悪あくの酬むくいです。どうか、世間せけんにそのことがわかつてもらいたいのです。さすがに、子供こどもどうしの間あいだでは同どうじよう情じようがあつて、行ぎようし商やうに出でると、鉛筆えんぴつや、紙かみなどを学がっこう校せいとの生徒せいとが買かつてくれます。ありがたいことです。」と、こよう、意味いみありげにいつて、おしようさんは、扇せんす子すでふところへ風かぜを入れていました。

この家いえの軒下のきしたには、薪たきぎが、山やまのごとく積つんでありました。また土間どまには、つけ物ものおけや、みそだるが、並ならべて置いてあり、中なかすみの方ほうには、まだどろのついたままの芋いもや、にんじんが、ころがつていました。さらに、奥おくの間まへ目めを向むけると、百ひゃく姓せうや家かにしては、ぜいたくすぎる派手はでな着物きものが、同おなじように高価こうかな帯おびといっしょに衣いこう桁けうへかかつていました。外そとから見て、何なんびと人ひとか、ここに悲かなしみがあると思おもうだろうか。むろんここには近所きんじよまで迫せまつた飢餓きがもなければ貧困ひんこんもなかつたのでした。

「ふとる盛りさかの子こに、腹はらいっぱい食たべさせられないのは、なによりもつらいのです。このあいだ、町まちからきた子こが、白しろい飯めしをどうしてもたべません。きいてみると、こんな光ひかるご

飯を、見たことがないというのです。」と、話しました。

「光るからというんですね。」

「なんでも、その子は、母親と方々を転々したというから、これまでの生活が、察しられますが、ほかにも子供どうしで、あの木の芽はたべられそうだとか、あの草を煮てたべたら、おいしかろうとか、真剣にいい合っているのを聞くと、いじらしい気がして。」

これをきいて、地主は、なんとも返答ができなかった。そして、おしよさんの今日きたわけが、いよいよはつきりのみこめたけれど、ただ寄付はしたくなかったのです。

そして、半分は、いつわりなく、心のうちをいつて、弁解するように、

「せがれが、もし生きていますなら、どこか山の中で、へびや、とかげを食っていることでしょう。そう考えると、だれも彼も、いつしよに苦しむがいい、と思ひまして、たとえば子供であろうが、特別に同情する気になれません。」といひました。

「いや、正直なお話です。あなたばかりでなく、みんなが、悪い夢を見ていますのう。」と、おしよさんは答えました。

「悪い夢とおっしゃいますか。」

「さよう、悪い夢にちがいない。すべて夢からさめるのを悟りといいますのう。別に、美しい、なごやかな、真の人間世界があるはずだが。」と、おしようさんは、いいました。「どうしたら、その世界を知ることができますか？」と、地主は、いいました。

「それを、いま私がいってもわかりません。正しい心をもちながら、忘れたのであれば、かならず悟る日がありますじや。」

「つい、長居して。」と、おしようさんは、あいさつして、縁側へ出てから、庭のさるすべりを、ほめて帰りました。

ある日、地主は、用たしてお寺のそばを通ると、ちようど孤児たちが、庭で遊んでいました。境内には、はぎの花が盛りなばかりか、どこからともなく、もくせいのが酸っぱいような香りがただよってきました。

一人の子が、ふいに、

——南から、南から、とんできた、きた、渡り鳥、うれしさに、楽しさに、——と、うたい始めたのです。すると、ほかの子も、手をたたいて、調子をとりました。歌うと、どの子の顔を見ても、無心で、さも楽しそうでした。

おそらく、このときの子供の心は明るく、なんの悲しみもなかったでしょう。地主は、

それに誘われて、自分が子供の時分を回想しました。自分にも、こんな時代があつた。いたずらをして、しかられても、すぐ悲しみを忘れて、なにを見ても楽しく、美しく、だれ彼の差別なくなつたのであつた。

「おしようさんが、いわれたように、子供に罪はない。すべてが大人の責任なんだ。子供は、いつも美しいし、子供の心は、いつも朗らかだ。それを、なんと大人が、一たび道を誤つたばかりに……。」

こう感ずると、地主は、急に悪夢からさめたような気がしたのでした。同時に、目の前へ、清らかで、平らかな人として踏むべき道の開けるのを感じました。地主は、いきいきとして、歩きながら、自分のからだに、良心の火がまだ残っていたのが、限りなくうれしかったのでした。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「心の芽」文寿堂出版株式会社

1948（昭和23）年10月

初出：「社会 創刊号」

1946（昭和21）年9月

※表題は底本では、「子供《こども》は悲《かな》しみを知《し》らず」となっています。

※初出時の表題は「悲しみを知らない噺」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 子供は悲しみを知らず

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>